

Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2017.11.01

その用事は何であったか

道因寺住職 相馬 豊

こんにちは。先ほどご紹介いただきました白山市にあります道因寺の住職をしております相馬豊と申します。どうぞよろしくお願いたします。今日は朝方少し雨が降ったのですけれども、その雨も上がりまして太陽のぬくもりの中、こ

まいりましたし、また皆さん方もそれぞれに色々な事に出会ってきたことがあるかと思えます。

杉山平一さんの言葉

やって浄光寺さんの報恩講に足を運んでいただきましてどうもありがとうございます。昨年

今年の夏でしたけれども、一夏をかけた方の方の本をゆっくり、ゆっくりと読み進めました。お名前が杉山平一さんという方です。1917年にお生まれになりました。2014年に命を終えられました。満97歳でした。その方が日常生活の中で出会ってきたこと、感じ取ったことを言葉に綴って書き著

された本がありました。その本を一夏かかって読んだのですけれども、その読んでいった中に、次のような言葉が出てまいりました。

ものを取りに部屋へ入って何を取りにきたかを忘れてもどるところがある。もどる途中でハタと思いがすことがあるが、その時はすばらしい

先ず、ご自身の日常生活の中で感じとられたことを素直に書かれておりました。その言葉は、読んでおりまして、実は私のことだと言いつたように感じました。本当に最近

身体が先にこの世へ出てきてしまったのである。その用事は何であったかいつの日か思いあたることのある人は幸福である。思いだせぬまま僕はすくすくの世へもどる

は人の名前も出てまいりませんし、あるいは地名も出てまいりません。だから我が家での日常生活の会話の中では、ついつい私自身が「あれ何処にいった、あれ、あれ」というふうなことを繰り返す言わんではね。ところが聞いている家族からしてみれば「あれ」と言われても分からないというんですよ。それはそうです。分かっていて自分だけ

こういうお言葉が杉山さんの本の中に出てまいります。「身体が先にこの世へ出てきてしまったのである。その用事は何であったか」、ここに「用事」という言葉が使われておりますけれども、私たちも用事という言葉は普段の日常会話の中では繰り返し使っている言葉遣いではないでしょうか。

今日も朝です。家族の方から今日の用事はという用事ですかと

聞かれました、今日は金沢の森山の浄光寺さんの報恩講があります。そういうふうな事を家族との会話の中で使います。また皆さんもそれぞれ用事という言葉を使っておられると思います。今日、浄光寺さんへ足を運んできたのも、報恩講という用事に会うという事で用事といっております。また、この報恩講が終わりますから、皆さんもそれぞれ次の用事に向かって歩いて行かれる。中にはもうすでに明日の用事もスケジュールの中に組み込まれている方もいるかもしれません。そして今月の31日までの予定ももうすでにカレンダーや手帳の中に書き込まれている方もおられるかもしれません。

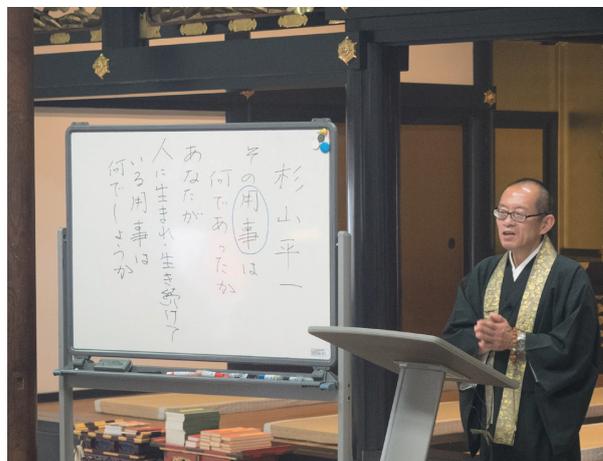
私達は、この用事という言葉は日常的に使いますが、私達は予定という言葉遣い、あるいは時間の制約を受けた中で用事と、こういうふうな言葉遣いの中で用事という言葉を受け止めております。しかし杉山さんは、私たちが思っている予定であるとか、時間的制約を受けている用事ということではなくて、その前の言葉ですよ、「身体が先

にこの世に出てきてしまったのである」と。

私達は母親の体の中で十月十日あまり過ぎて、そしてこの世界に生まれてまいりました。生まれてきた時は赤ん坊です。まだ名前も付いておりません。首も座っておりません。目もまだ見えているのか見えていないのかも分からない。先ず、身体が先に生まれてきた。そして成長する中において、言葉を覚えて、言葉を通してながら会話をしていくようになって現在の私たち一人ひとりの姿になってまいりました。

本当の用事

先ず身体が、先に生まれてきた、ここが非常に大切なことではないでしょうか。私たちが後から身につけた知恵、知識というものではなくて最初に身体が生まれてきたという身体も人として生まれてきたということですね。そうしますとこの用事は何であったかということ、あなたが人に生まれ、生き続けている用事は何でしょうか。こういうことになるのではないのでしょうか。人に



生まれ、生き続けている用事は何でしょうか。こういう杉山さんから私たちに日常生活の中でも問われたらやはり答えるということをしします。返事をする。何か言葉をもって伝えていくということをしします。しかしこの場合は、答えたり応じていくということよりも、もう一度この問いかけの言葉に私自身が立ち止まって、振り返り、引き取っていくということが非常に大切なことではないのでしょうか。

現代という時代は、本当に慌ただしい時代です。時間を刻むようにして次から次へと様々な出来事に私たちは振り回されて、そのことに追われ、追われ生きています。あれもしなければならぬ、これもしなければならぬ。色んな事に出会ってきているわけです。そういう忙しさの中、慌ただしさの中でこの杉山さんが言われましたような問いかけの言葉に向き合うという時間も取れなくなってきたのでないでしょうか。こういう問いかけの言葉に今一度、立ち止まり振り返って、今日まで生きてきたという事実の中にあってもう一度、人として生まれ、生き続けている用事は何でしょうか。ここに立ち止まるといことが、今の現代という時代では本当に難しい時代になってきました。しかし、実はこれが私たちの基本的な一番大切なことではないのでしょうか。

実は私自身もこの杉山さんの言葉に出会いました時に正直に言っただけで困りました。困り果てたと言った方が正しいですね。どうしようと。改めて自分自身に用事は何でしょうかと

言われてみても、言葉が出てこないのですよ。今日まであれもしてきま

した。これもしてきましたというこ

とは色々あるわけですけども、あ

なたが人として生まれ、生き続けて

いる用事はなんですかと言われてみ

たら本当に困り果てました。こうい

うことをこの言葉に出会った時に自

分自身の中に衝撃が走りました。一

体何をしていたのかなど。そうしま

すと、私たちがこの年齢まで生き続

けてきたということは、間違えのな

いことですけども、改めて本当は

どういう用事をもって生き続けてい

るんだろうかなど。そこにもう一度

人身を受ける

問いかけの言葉に向き合っていく。

そして自分というものをもう一回訪

ねていく。そういうきつかけがこの

言葉遣いではないでしょうか。

繋がりますよね。

人身受け難し、いますでに受く

『勤行集』（赤本）見返し

また蓮如上人が書かれました『御文』

の言葉で言いますと、五帖目十六通

「白骨の御文」と呼ばれておりますけ

れども、その「白骨の御文」の中に

いまだ万歳の人身をうけたりとい

うことを聞かず

『勤行集』（赤本）六七頁

こういとお言葉が出てまいります。

私たちは本当に慌ただしい中を生

きてきております。それも人として

生きておるのですけれども、その身

に受けたということが一体どうい

うことか聞くということができなく

なっているのが現代という時代

でないでしょうか。

振り返ってみますと、現代という

時代は、簡単に便利で快適で合理的

な社会が築かれました。そして、そ

の恩恵を私たちは受けております。

そういう現代という時代を生きてい

ますといつの間にかこういう問いか

けの言葉に自分が立ち止まって振り

返ることがなくなってしまうている

のではないのでしょうか。

また、一人の人間として生きてい

ける社会状況もあります。例えば、

私も使っているのですけれども、皆

さんの中にも携帯電話、スマートフォ

ンを使っておいでる方もいらつしや

るかもしれません。この携帯電話、

スマートフォンというのは非常に便

利です。自分が電話をしたい時に相

手に何時でも電話できる。あるいは

メールや「LINE」を通して様々な情報

が私たちのところに届いてくる。ある

いは私の情報として発信することも

できる。本当に携帯電話、スマート

フォンがなくなってしまうたら私た

ちの日常生活の一角が崩れていくと

いうことになってしまいます。

そして、もう一つが今どの街の中

にもありますコンビニエンスストア

です。これも本当に便利です。急な

ことがあってもコンビニに行けばあ

りどあらゆるものが揃っています。

それも24時間営業です。自分の食

べたいもの、飲みたいものを自分の

生

活時間に合わせて買い求めることが

できるということ。そして、そ

れをどこで食べてもどなたからも不

平を言われることはありません。本

ことではないでしょうか。私が人として生まれ、生き続けてきた用事は何でしょうかというところが便利で快適で簡単に合理的な生活空間を手に入れた時、いつの間にか私たちはそういうことを問わなくても生きていくける状況がもう目の前に広がってしまったということですか。

しかし、この本当の用事は何でしょうか、実はここに私たちの根源的な一番深い問題が込められているわけでしょう。時代がどういう風に変わったとしても、社会がどういう風に変わったとしても私たちの一人ひとりの奥底に眠っている大きな問題なのではないでしょうか。まさにこの世に出てきてしまったのである。その用事は何であったか、いつの日か思いあたるときのある人は幸福である」と。

私たちはいつの日か思い当たるといふことがあるでしょうか。もしもこの言葉に出会うことがなければ私たちはそのことを問うこともなく、今の社会状況、生活環境の中で豊かな幸せな生活というものを追い求め

ていく。確かに豊かな幸せを願いつけてきた。しかし、今私たちの身近なところでどういふことが起こってきているでしょうか。人と人との会話がなくなってきたということがあつたり、老老介護の問題があつたり、色んな問題の中で、人が人として生きていくことの生き難さ、不安、孤独、そして様々なもので悩む、そのことに苛まれていく数多くの人たちやがどんどん増えてきたのではないのでしょうか。身近なところで豊かな幸せを求めている、それは皆んな求めるわけです。しかし、反面そこには矛盾するような出来事がいつの間にか私たちの生活の中に入ってきているということがあります。

蝉死んだね

今年の夏でしたけれど、毎月24日にお伺いするご門徒さんの家があります。平生はおじいちゃんとおばあちゃん二人と私でお内仏の前でお勤めをするのですけれども、その日は7月24日、学校が夏休みだったということもありますし、偶然にも日

曜日ということもありましてお父さん、お母さん、そして子供たち二人もお家におられまして家族6人と私と一緒に出勤ができました。そのお勤めが終わった後、お母さんが入れてくださったアイスコーヒを飲みながら普段なかなか会話をすることができないお父さんと話しをしておりましたら、お父さんがこんなことを言われたのです。

昨日、子供たちと久しぶりに遊ぶことができました。その子供たちと遊ぶことを通して上の子から私自身大変なことを教えられましたと、こう言われた。いつもは子供に勉強しているかとか、宿題終わったかとかやかましく言っているながら、昨日は反対に子供のほうから自分の抜け落ちていたことを教えられた次第ですと、こういうことを言われたんです。それでお聞きしました。どういふことをお父さんから教えられたんですかと。こういうふう尋ねましたら、お父さんはこんなことを言い始められました。

昨日、子供たちが2人で外で遊んでいた時に庭木に止まっている蝉を

見つけて、玄関に入ってきて、「お父さん蝉、蝉、蝉」と、こういうふうには蝉の名前を連呼したと。私自身子供に「蝉が一体どうしたんや。蝉今も鳴いとるがいや。そんな蝉が珍しいのか？」と言っても上の子は、「いや、蝉なんやと。一緒に見に来て！」と。こういうふう言われるもので子供と一緒に蝉が止まっている庭木のところへ行ってみました。

そうすると確かに木に蝉が止まっていますでしたが、成虫の蝉ではありませんでした。深夜に穴を掘って幼虫のまま木によじ登ってきて、殻を破って羽化ともしますか孵化ともうしますか脱皮ですよ。その蝉がここに止まっていた。まだ体も真っ白で羽も透き通っている。そういう蝉が目の前に止まっています。その蝉をまずは、携帯電話のカメラの機能で写真を撮って、そして写真を子供と見せていた。でもこのまま日中その様子をずっと見ているのも暑い夏ですから疲れる。一旦家の中に入って、ゲームをしながら遊んでいて、そのゲームが一段落したところでもう一度一緒にその蝉のところへ行ってみた。

ところが時間が経っていたにも拘らず、全く蟬が変化していない。それで少し木をよじ登って蟬を捕まえてきて、自分の手のひらに蟬を置いてついたり、持って動かしてみたりど反応がない。どうも反応がないので子供に「この蟬、亡くなっているかもしれないよ」と、こういうふうに伝えたら、男の子が、「蟬死んだのか？」と。下の女の子も、「蟬死んだの？」と。こういうふうに言われるので手に載せた蟬を子供たちと突付いてみたけど一向に反応がない。そうすると上の子が「蟬死んだね」と。それで「どうする？」と言ったら下の女の子が、「埋めてあげよう」と。それで、その蟬が這い登ってきた小さな穴を掘ってその蟬を埋めてあげたそうです。そしてその後、子供たちは友だちと学校のプールに泳ぎに行ったり、遊んだりして、お父さんも自分の仕事をして夕食後、上の男の子と一緒に風呂に入った。湯船で男の子がお父さんに向かって「蟬死んだね、じゃあ僕も死ぬの？」と。こういうことを投げかけてきたと。その時、ハツとしたそうです。確か

に今日子供たちと一緒に蟬を見つけ、その蟬を埋めたということはやった。しかし、まさかそのことが子供の中に留まっていた、そしてその留まったことを通して改めて、「蟬死んだね、じゃあ僕も死ぬの？」と、こう問いかけられた時、親として一言も言えませんでした。いつの間にかこの子供の命に対する眼を、親である私はもう、持っていないのではないか、そんな気がしました。大変なことをその蟬の様子を通して子供から教えられたのです。いつの間にか慣れっこになって当たり前になっていた自分、そこに改めて子供から「蟬死んだね、じゃあ僕も死ぬの？」と問いかけられた時、本当に驚くしかなかった。

私たちが有り様の中から見ましても命の眼を私たちは培ってきたわけです。しかし、その培ってきた命の眼さえもいつの間にか曇りはじめたのではないのでしょうか。または疑問を持たなくなったという事はなかったのでしょうか。蟬が鳴いている、当たり前だと。あるいは蟬が一夏を終えて体を横たえているのを見ても何も感じなくなってきたのではないのでしょうか。しかし、子供は「蟬死んだね、じゃあ僕も死ぬの？」と。まさに今が問題になったわけでしょう、子供にとって。そのお子さんにとって今自分の問題として蟬の死が自分の死ということと初めて繋がって、怖くて怖くてしょうがない。その中であって、「じゃあ、僕も死ぬの？」と問いかけをしたわけでしょう。しかしその問いかけに対してそのお父さんは、本当にハツとしたし、驚いた。しかし、何も答えられなかった。それは私もそうではないでしょうか。いつの間にかそういうことに見慣れ続けてきて当たり前のように思ってしまった。つまりいつの間にか自分の存在が分からなくなってきた。それをこの杉山さんは「この用事はなんであったか」と尋ねた。

私たちが大切なことをいつの間にか問わなくなったし、疑問も持たなくなった。当たり前のように毎日を過ごす感覚の中で、大切な命の眼さえも曇って見えなくなってきたという事実があるのではないのでしょうか。実はこのお話を聞いて自分自身もハツとしました。ああ、その通り自分自身もいつの間にか命の感性、眼を忘れ果てておるんやなと。そしていつの間にかこの私も死ぬということは分かっていた、決して今日という日ではないと思っっている。またはもう少し未来があるだろうといつの間にか錯覚しているのではないのでしょうか。死ぬことは多くの方を見送ってきているから知っているんです。知っていてもそれが自分のこととは中々ならないです。しかし、このお子さんはまさに蟬の死を通して自分の事として真向きになっていた。そうすると改めてその私たちがここに人として生まれ、生き続けてきている用事は何でしょうか。ここに問いかけの言葉の中にもう一度私たちが訪ねていかなければならない大きな問題があるんじゃないのでしょうか。

苦と楽

そうしますと一体私たちは、私も含めてですけれども、今日まで何をしていたのか。先ず私たちは嫌なものがあるわけです。苦というも

ようなスピードで過ぎていきます。

蓮如上人もまさに「去年の秋も過ぎてしまつて今年の春ももう過ぎていきました」と。年月を送ること昨日もすぐ過ぎて、今日も過ぎようとしていきます。「いつの間にか老いて白髪となつてしまいました、その間何をやってきたのか私自身憶えておりません。また何をしてきたかも知りません」とこういうお言葉を四帖目四通の冒頭で言われています。

私たちはこの年齢まで一生懸命生き続けてきたことは間違えのないことです。しかし、何をしに生まれて来たのかということが分からないということです。分かっているのは目の前のこと。その都度、その都度のことは分かるのです。しかし、本当に何をしてきたのかと聞かれたら分からない。

何をしに生まれてきたのか

ご門徒さんで現在、末期がんを告知されて入院中の男性の方がおられます。先達で、その方のご家族からお電話をいただいて、主人がどうし

ても話したいことがあるので病室へ来てくれませんかということをやつてますと。その電話を受けて、そして病室へ訪ねていきました。その時、

ご門徒さんの男性の方がこんなことを言われました。先生から末期がんでもう少しのお命ですよと言われてしまいました。それを踏まえて自身を今日まで何をしてきたんだろうかと妻にお願いしてノートとペンを買ってもらつてきた。そのノートを開いて自分の今日までやつてきたことを書き始めたのですけれども、書いてみると辛い思い出と苦しい思い出しか出てきません。あとはあれもしてきた、これもしてきたということは綴つておるけれども、一体私は何をしに生まれて来たのでしようか、どうか教えていただけませんか。辛い思い出と苦しい思い出ばかりで、あれもしてきた、これもしてきたけど何にもないというんですよ。「一体何のために私は生まれてきたんでしょうか。どうか教えてください」

「こう突然言われたものから、咄嗟に出してしまったんですけれども、辛い思い出や苦しい思い出、

そのひとつひとつがあなたの人生を支えてきた尊い人生ではなかったですか。そういうことを自分から思い

もかけず言つていた。それをどういう風に受け止められたかはお返事はなかったのですが、私たちは本当に色んなことに出会つてきて、色んなことをしてきたけども、何をしに生まれてきたのかと、その用事は何であつたかと改めて綴つてみたら辛い思い出、苦しい思い出しか書けない。そうすると改めてこの用事は何ですかと。確かにこの年齢まで生き続けてきたことは間違えのないことやけども、人として生まれて、生きつづけてきた用事は何やと。それが「人身受け難し、いますでに受く」、受け難き身を今ここに受けていながらその人身が分からない。一度も聞いたことがない。改めて私たちに問いか

けられてきたわけですよ。その問いかけに對して問いかけの言葉をそのままに置いておくことはできません。何か手がかりというものを私たちは欲しいわけです。

蓮如上人のお言葉の中にその手がかりを教えてください。『御膳、まいり候うときには、御合掌ありて』と。食事時なんでしょうね、蓮如上人の目の前に御膳が運ばれてきた。その時、蓮如上人は合掌されて、その時こういうことを言われたんです。

御膳、まいり候うときには、御合掌ありて「如来・聖人の御用にて(親鸞)き、くうよ」と、仰せられ候う

ここに「御用」というお言葉。これは杉山さんの「用事」と同じです。あるいは「人身受け難し、いますでに受く」と。まさに御用です。そしてその御用は「き」これは着る、「く」これは食べるです。「着食うよ」とこれは私たちの日常生活ではないのでしょうか。夜寝る時には日中の洋服を脱いでパジャマに着替えて就寝し、起床の時にパジャマを脱いで日常生活の洋服に着替えようとする。夏場ですと汗をかいたから着替える。着るといふことです。それから食う、食べる。私たちは普段ですと、

朝食、昼食、おやつ、夕食というふうにそれぞれ食事をします。私たちの食事というのはどういう時間帯で食べるでしょうか。一つは朝起床してからそのエネルギーを得るために朝食を食べる。そして午前中、一生懸命に働く。そして、またお腹が空くのでお昼からの仕事のために昼食を食べる。そして、午後の仕事にエネルギーを使っていく。晩まで少し間があるから間食としておやつを食べる。そして、一日の消費したエネルギーを補充する、体力を回復したり、気力を回復するために夕食をいただいでいく。また次の朝同じようにする。私たちが食うというのは、時間がきたからとか、お腹が減ったから食べるになってませんか。

ところが蓮如上人は、ただ着るのと、食べることを、それは御用やと言ったんですよ。仏さまから、親鸞聖人からの御用をいただいているんですよというのです。ここを私たちは見落としていたのではないのでしょうか。簡単に合理的で便利なものを手に入れてきたけども、その一日と

いうものはすべて御用をいただいた一日やというのですよ。今日、皆さんがこの時間までこの本堂で過ごされたのも御用やということですよ。朝、着替えられて、この本堂まで来られた。それは御用を果たすための一日が始まったということですよ。そうすると、私たちの一日というのはまさに仏、親鸞聖人の御用をいただいた一日を送ってきているということですよ。ところが、私たちの一日はどうか。出るのは愚痴です。あるいは人を誹謗中傷するような言葉、このことしか出ないんでないでしょうか。しかし、蓮如上人は愚痴とか誹謗中傷を言ったのではなくて、この一日がすべて如来、親鸞聖人の御用いただいた一日を送っていますと。そこに着ることも食べることも含まれると。ただ時間が来たから着替えて、時間が来てお腹が空いたから食事をいただくんではないと。すべてがひとつひとつの日常の生活がすべて御用をいただいておりますということですよ。勉強に励むのもそう、仕事に精を出すのもそれは御用を果たす。

私たち一人ひとりに御用をかけられた一日を毎日、毎日送っているということですよ。ところが、私たちはいつの間にか生活は生活。そして生活の中の優先順位をつけていきま

す。そして、一方でこうやってお寺に足を運んでくるというかたちで足を運んできた。しかし、いつの間にか生活とお寺でお話を聞くということが乖離かいりしているんじゃないでしょうか。やっぱり生活は生活なんだ。お寺で話しを聞くのはひとつの時間的な余裕というかたちではない。ところが蓮如上人は、そうではなくて教えを聞くことがもう生活なんやと。教えを聞くという生活が、そのまま私たちの日常生活として言われているのです。

改めて、私たちはどのような日常生活を過ごしているのでしょうか。今一度、真摯に丁寧に点検、吟味してみることが大切です。私たちが見失っているのは、楽しく、愉快な人生ではないのです。本当に見失っているのは、自分が人間に生まれて来たという、この一点を見失っているのです。そして、世の中で、身を立てることのみに、生活を尽くしている

いえ。身体が先にこの世へ出てきてしまったのである。その用事は何かであったか。この言葉の響きが、今の私に立ち止まり、振り返り、そして聞きとることの大事を語りかけているのです。

《編集後記》

◇本文は平成二八年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

「除夜の鐘・修正会」のご案内

・「除夜の鐘」

十二月三十一日(大晦日)

午後十一時半

・「修正会」

一月一日(元旦)

午前零時

除夜の鐘に引き続き修正会のお勤めがあります。お誘いあわせお参り下さい。温かい食べ物や飲み物をご用意しております。

◎お知らせ

・「きこまいけ」報恩講のお知らせ
十一月二十八日(火)・午後二時より
勤まります。どなた様にもご参加いただけます。

・「きこまいけ」冬休みのお知らせ
十二月～二月まで冬休。来年三月より再開いたします。